読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

「後悔しないように、毎日頑張る」とインタビューに答える田口麗斗投手。メモを取る子どもたちは真剣な表情だ（2・3面へ）

巻頭特集 東京・稲城の小学5、6年生が1日新聞記者に
ジャイアンツを学ぼう! 2・3

鍛える 食べる **トップアスリート1日合宿** 4・5

夏休み親子新聞教室 6・7　NIE全国大会の現場から 8

学校×企業　都立立川国際中等教育学校が読売新聞でインターンシップ 9
三菱UFJモルガン・スタンレー証券「こども参観日」 9　NRIと読売新聞が中高生向け体験イベント 10

リレーエッセー　独ヤーコプス大学ブレーメン「自然環境への変化」 11

2018.8
Vol.44

GIANTS ジャイアンツを学ぼう！

東京・稲城の小学5、6年生が1日新聞記者に

東京都稲城市の小学校5、6年生を招き、「1日新聞記者」としてプロ野球の舞台裏を探ってもらうスペシャル企画「ジャイアンツを学ぼう!」（主催・読売新聞社、読売巨人軍）が7月31日、地元の「読売ジャイアンツ球場」で行われた。

記者と巨人軍スタッフがアドバイス

稲城市と稲城市教育委員会が後援し、市教委の協力で市内の5、6年生にチラシを配るなどして応募を呼びかけたところ、多数の申し込みがあり、この日は抽選で選ばれた19人が参加した。出前授業の経験豊富な読売記者と、チームの隅々まで知っている巨人軍のスタッフがアテンドし、子どもたちにアドバイスした。

「読売ジャイアンツ球場」はふだん、巨人軍の2軍の試合が行われており、主に若手の鍛錬の場となっている。1軍の主力選手が練習に訪れることも珍しくなく、ジャイアンツファンにはおなじみの施設だ。この日は巨人-楽天の2軍の公式戦が行われていた。

まず、ジャイアンツの打撃練習をベンチから見学。30度を超える猛暑の中、バットを振る選手の姿に、歓声があがった。通りがかった選手に「暑くないですか?」と質問する子どももいた。練習終了後はグラウンドに出て球拾いを手伝い、選手やスタッフに声をかけてもらって興奮の面持ちだった。

インタビューして熱心にメモ

続いて、インタビュータイム。犠牲バントの世界記録保持者で、ギネスブックに載っている川相昌弘二軍監督は「1軍で通用する選手を育てることが責任。常にチーム全体のことを考えているので、選手時代よりストレスは多いかな」と打ち明けた。子どもたちは、ひと言も聞き漏らすまい、とメモ帳にペンを走らせた。1軍でも活躍している田口麗斗投手は「一日を後悔して終わらせたくないので、毎朝、自分がやるべきことを確認して、必ずすべてやり遂げるようにしている」とプロ選手の心構えを語った。「変化球はどうやって覚えましたか?」「子どものころはどんな練習をしていましたか?」と質問も相次いだ。

グラウンド整備を担当するスタッフは「夏場は芝生の伸びが早いので、2日に1回は芝刈りをしている」と仕事を説明。スポーツ報知の担当記者は「選手とファンの間に立って、ヒーローが舞台裏でどんな努力をしていたのか、を読者に伝えたい。選手の本当の気持ちを知るために日々、グラウンドに通っている」と話した。続いて、子どもたちは選手がふだん、食事を取るなどしているクラブハウスを見学し、選手の生活をサポートしているスタッフにインタビュー。試合の始球式にも参加した。

①ベンチから間近で打撃練習を見学。「スイングが早い」と歓声があがる　②「見ていて面白い?」「暑くないですか?」と打撃練習を終えた選手とやりとり　③スタッフや選手たちと一緒に球拾い。「投球用」「ノック用」でボールが別々になっていると知り、「へーっ」と感心　④川相2軍監督をインタビュー。「監督はベストナイン、ゴールデングラブ賞を取っていますよね」と、事前勉強の成果を質問に生かす　⑤4時間を超えるプログラムになったが、疲れる様子もなくあっという間に「ジャイアンツ新聞」を完成

思い思いに新聞作り

子どもたちは最後に、インタビューで聞いた話をそれぞれ「ジャイアンツ新聞」としてB4大の紙にまとめた。本紙記者が新聞のまとめ方を助言し、「たたかう気持ちが重要」「チームのことを考える」「選手を第一に、球場をきれいに」など、印象に残った言葉を見出しにとって、紙にびっしりと記事を書き込む子どもが目立った。

市立第四小5年の外山珠凪（とやますず）（10）さんは「監督や選手、スタッフなど、試合にかかわる人たちの気持ちが分かっておもしろかった。野球がますます好きになった」と笑顔で語った。子どもがまとめた新聞に目を通した保護者からは「インタビューの中身がしっかり書けていて驚いた」「こういう行事には、また参加したい」という声が出ていた。読売新聞と巨人軍では、今後もこうした学びの企画を提供していく考えだ。

キャリア教育のきっかけに

今回の企画は読売新聞社と読売巨人軍による初めての試み。子どもが興味のあるテーマについて、当事者から話を聞き、自分の言葉でまとめる力をつけることをめざした。また、「興行」という一見華やかな舞台が、どのように作り上げられているのかも学ぶことも目標にした。巨人軍としては、普段お世話になっている地域への恩返しの一環に、という狙いもあった。

読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の岡部匡志部長は「子どもにとってプロ野球の世界は憧れや親しみの対象だが、実像はなぞに満ちた魅力的な存在で、言葉の学びの素材として申し分ない。様々な人たちがその世界を支えていることを知ることで、キャリア教育のきっかけにもなる」と企画の狙いを説明する。また読売巨人軍の土屋創ファン事業部長は「ファームの試合は、1軍を目指す選手の真剣勝負の場。チームとしても、ファンに喜んでもらえるよう、運営には力を入れているので、地域の子どもたちに関心を持ってもらえるのはうれしい」と話していた。

元気ニッポン!

鍛える 食べる

トップアスリート1日合宿

1 Day Training with Athletes

中学・高校の卓球部で活動する生徒たちが、日本オリンピック委員会（JOC）エリートアカデミーの選手らと一緒に練習し、食事についても学ぶ「鍛える、食べる　トップアスリート1日合宿」（読売新聞東京本社主催、味の素共催）が8月7日、東京都北区の味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）で開かれた。2020年の東京五輪・パラリンピックとその先に向けて、読売新聞社が進める「元気、ニッポン!」プロジェクトの一環で、昨年のバドミントンに続く第2弾。生徒たちは効果的な食事のとり方を学び、選手らと交流を楽しんだ。

精鋭７選手と練習

●7校の卓球部員27人が参加

「カコン、カコン、バシッ」――。卓球台をはさみ、生徒と選手が球を追い、打ち合う音が、練習場いっぱいにこだました。

練習に臨んだのは東京都、神奈川県、千葉県の中学校・高校7校の卓球部員27人。今年の全日本選手権男子シングルスを史上最年少で制した張本智和選手、同選手権ジュニア女子シングルス優勝の長崎美柚（みゆう）選手らエリートアカデミーに在籍する7選手と一緒に汗を流し、強化スタッフのコーチ陣から指導を受けた。

最初は硬さが目立った生徒たちだが、日本卓球協会の宮崎義仁強化本部長が「打つ時、声を出して！息を吐くことで瞬発的な力が出る」と呼びかけると、「アッ、アッ」とリズミカルな声を上げながら打ち込み始めた。

後半は試合形式の練習が行われ、張本選手とラリーの末、点を奪う生徒も現れた。

張本選手（右端）らエリートアカデミー生と打ち合う中高生

球を打ち返そうとする女子生徒

●選手たちにも刺激

「1日合宿」を締めくくる選手との質疑応答では、質問が相次いだ。「普段の練習で心がけていることは？」との質問に対し、選手たちは「コーチの話をきちんと聞く」「試合をイメージしながら、緊張感を持って取り組む」などと回答。「勉強はどうしてますか」との質問には、「短時間で集中してやっている」「遠征先で空いている時間を活用している」などと答えていた。

星美学園高校3年、木村菜々花さんは「長崎選手にサーブの打ち方を教えてもらった。トップアスリートは練習でもミスが少ない」と感心した様子。

西本郷中学校3年、鈴木颯太さんは「コーチから『体全体を使って打て』と言われ、直したら本当に良くなった。強い選手たちを育てているコーチに教われてうれしい」と喜んでいた。

選手たちにも刺激になったようで、張本選手は「上手な人が多くて、一緒に練習していて楽しかった」。長崎選手は「頑張ってね、と声をかけてもらった。東京五輪ではメダルを目指したい」と、力を込めた。

質問に笑顔で答える長崎選手（左）ら

食事のとり方学ぶ

●五つをそろえる

練習と併せて、正しい水分や栄養の補給を学ぶ教室が開かれた。

講師を務めたのは、北京五輪の競泳日本代表で管理栄養士の柴田隆一（りゅういち）さん。「今年は猛暑。汗をかくと、ミネラル分も一緒に体外に出てしまう。水と一緒にミネラル分を取ろう」と話し、塩や砂糖、レモン果汁などを加えたオリジナルドリンクの作り方を伝授した。

食事については、〈1〉米やパンなどの主食、主菜、副菜、牛乳・乳製品、汁物の五つをそろえるよう努める〈2〉そろわない時は、翌日の食事などで補う――とアドバイスした。張本選手のある日の食事を紹介し、「果物を加えた六つがそろっている。野菜をしっかり取っている」などと評価した。

生徒たちは、NTC内の食堂でとった昼食で、教わったことをさっそく実践。肉料理やサラダなど、豊富なメニューの中から、五つがそろうように自ら考えて料理を選んだ。

また、練習の前後に、アミノ酸入りのサプリメントを飲み、必要なタイミングで栄養を補う「補食」の大切さも学んだ。

安田学園中学校3年の中川泰雅さんは「食事は大事だと思った。これまで朝食を抜くことがあったが、取るように心がけたい」と話していた。保護者からは「毎日の食事作りは大変だが、子どもがバランス良く食べられるようサポートしたい」といった声が上がっていた。

JOCと味の素は食の面から日本代表選手らを支援しようと、「ビクトリープロジェクト」を進めており、効果的な食事のとり方として「勝ち飯」を提唱している。子供からお年寄りまで、健康維持や体力向上にも役立つ考え方だという。

●張本選手の昼食は合格点

この日の張本選手の昼食は、主食の「天津丼」、主菜、副菜、牛乳の四つと果物で合格点。これに汁物が加わると満点だった。サラダのお椀にはキャベツ、トマト、カボチャ、ワカメなどが盛られた。生徒たちは、「いろんな食材をもりもり食べていた」（和洋国府台女子中学校3年、須藤菜々子さん）などと感心していた。

昼食はバイキング形式。野菜も取り放題だ

エリートアカデミー

JOCが五輪をはじめ国際大会で活躍する選手を育成するため、2008年に始めた事業。全国の中高生の中から選ばれた選手たちが、NTC内で寮生活を送りながら、一流のコーチ陣による指導を受けている。アーチェリー、ボート、フェンシングなど7競技で36選手が在籍している。

張本選手（左）と談笑しながら昼食をとる生徒たち

張本選手の昼食メニュー

参加校

【公立】横浜市立西本郷中学校
【私立】星美学園中学校・高校▽東海大学菅生高校中等部▽桐朋中学校・高校▽安田学園中学校（東京都）▽市川中学校▽和洋国府台女子中学校（千葉県）
※いずれも読売教育ネットワーク参加校

【主催】読売新聞東京本社
【共催】味の素
【後援】日本オリンピック委員会（JOC）／日本卓球協会

当日の様子はこちらの動画からご覧いただけます

夏休み親子新聞教室

新聞を切り貼りしてスクラップ作品を作る「夏休み親子新聞教室」（読売新聞社主催）が8月、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれた。3回の教室には小中学生とその親など計80組195人が参加。この夏の記録的な猛暑や、サッカーのワールドカップなど、思い思いのテーマで記事や写真を集め、「世界に一つだけの新聞」作りに取り組んだ。

言葉探したり 発見アピールしたり

このうち8月4日の教室では、初めに新聞を活用した授業に取り組む2人の教諭が、日頃の実践を発表した。

東京都北区立柳田小の藤方裕介教諭は1年生の担任。新聞をめくりながら、親に似ている人などを見つける、ワークシートの取り組みを紹介し、「新聞から知っている言葉や写真を見つけるだけでも十分。保護者の皆さんは『こうしなさい』と押しつけないで」と話した。

東京都稲城市立稲城第四中の岩田美紀教諭は、はがきや新書サイズで本や詩を紹介するミニ新聞作りを報告。「新聞は本当に奥が深い。テーマを決めて記事を集める中で、新しい何かを発見できる。それをアピールして」と呼びかけた。

その後、秋山純子・読売教育ネットワークアドバイザーが、内容が一目で分かる見出しの大切さにふれながら、この日の作品の作り方を解説した。

共同作業、貴重な時間

子どもたちは、会場に積み上げられた読売新聞や読売KODOMO新聞、読売中高生新聞、英字紙ジャパン・ニューズなどをめくりながら、テーマを探した。気になる記事や写真、広告をいくつも切り抜き、レイアウトを考えながら新聞大の紙に貼っていく。注目した部分に蛍光ペンやサインペンで色をつけ、作品のタイトルとなる新しい見出しを考えた。子どもと親がそれぞれ感想を書き込み、親子で力を合わせてスクラップ新聞を完成させた。

「見出しや写真、グラフだけを貼りつけてもインパクトがある作品になるよ」などと、指導教諭が会場を回りながら子どもたちにアドバイスした。

最後に7組の親子が作品を手に発表した。子どもたちが自分のテーマや工夫した点、感想などを堂々と述べた。一緒に話し合いながら作品を作った親からは「最初は難しすぎるかなと思ったが、次々と記事を選ぶ姿を見て、成長を実感した」「子どもとの共同作業を楽しんだ貴重な時間だった」などの声が聞かれた。

お父さん・お母さんのアドバイスを受けて自分だけの新聞作り

新聞紙使って〝果物〟いろいろ

新聞を使って果物を作る食育コーナーが、会場の一角に設けられ、小学1年から中学1年の計7人が紙の感触を楽しんだ。

キッズ食育コンサルタント、サゴイシオリさん（東京都在住）が考案した工作「新聞フードクラフト」は、用意された実物のスイカや桃、ブドウなど9種の果物をよく見て、色や手触りを確かめることから始まる。一つ選んで、水彩絵の具で表皮の色を再現し、新聞紙1枚を塗る。乾かす間に別の新聞を丸めて芯を作り、最後に色付けした紙をかぶせて整え、遠目には本物のような〝果物〟を完成させた。

千葉県松戸市立六実第三小6年の伊藤健介君（11）は「色を近づけるのが意外と難しかったけど、楽しかった」と満足そう。サゴイさんは「新聞紙に色を塗ると、不思議と味のある色合い・風合いが生まれる」と工作としての魅力を語り、「新聞に触れるきっかけになり、身近な食材に興味を持たせることもできる。子どもも大人も楽しめるので、家庭でもやってみてほしい」と勧めていた。

サゴイさん（中央）の説明を受けて果物を作り上げていく子どもたち

サプライズゲストはピカチュウ

作品発表の直後、白い空手道着に黒帯姿のピカチュウが会場に現れた。このサプライズに「わあーっ、かわいいー」と子どもたちは歓声を上げた。

空手は、開幕まで2年を切った東京五輪の新競技。ピカチュウは東京都千代田区で開かれた応援イベントから、親子新聞教室に駆けつけた。たちまち子どもたちに囲まれ、記念写真におさまった。

「ポケモンの映画やテレビを見るのが好き」という東京都練馬区の小学2年・大久保あかりさん（8）は、読売KODOMO新聞からポケモンの記事を集め、「ポケモンえいが　みんなはもうみた？」の見出しで作品を仕上げたばかり。「ピカチュウにも会えてとても楽しかった」と喜んだ。

黒帯姿のピカチュウに大歓声

私だけの紙面づくり

世界中が暑かった

大川圭祐（けいすけ）君(11)
東京都江戸川区・小5

熊谷で41.1度を記録するなど今夏の猛暑が気になり、「暑い夏を食い止めろ!」を見出しに構成した。将来の夢は科学者。科学的な仕組みにも関心が高く、解決方法として「低気圧を呼ぶ」と書き込んだ。母・みさこさんは、「新聞を読んで世界中が暑いことにも気がつけた」。本人は「世界のことや解決策を、家に帰ってもっと調べたい」と闘志を燃やす。

動物守れ 強く訴え

伊藤碧菜（みな）さん(15)
千葉県松戸市・中3

オランウータンの密猟被害を報じる記事に胸が痛くなった。「動物をとことん守れ!」という見出しを、1文字ずつ活字を切り抜いて作成。「人と動物が一緒に暮らせる社会になるような活動が増えてほしい」とまとめた。母親のなぎささんは「娘が納得するよう、テーマ選びは任せた。自分で生き方を考える年齢になったんですね」と感慨深げだった。

野球好き 甲子園特集

中村誓（せい）君(7)
千葉県浦安市・小2

高校野球の記事を集め、「100回きねん甲子園新聞」の題字をつけた。「地元の高校は負けちゃったけど、勝った西千葉・中央学院を応援したい。題字に特に力を入れた」と、野球熱を作品に込めた。「試合が終わったら第2弾の新聞をつくる」と話す姿に、母親の直子さんは「テレビで試合を見ながらいろいろ考えていたことが分かった」と目を細めた。

写真から猛暑に興味

中島信太郎君(6)
東京都江戸川区・小1

見出しは「ことしのなつは、あついよー!」。当日の本紙朝刊1面「野菜高値」の写真が目にとまり、今夏の猛暑の記事を集めた。母親のまゆみさんが読み聞かせ、本人は「新聞を読んだ気分」と満足げ。傘のイラストを描き「あめよ、ふってー!」と見出しで訴える。自由研究作品として学校へ提出する予定。まゆみさんが「よく頑張りました」とほほ笑んだ。

パンダの数 少ない

竹内百亜（ももあ）さん(9)
神奈川県藤沢市・小3

大好きなパンダについて、パンダは国民的人気、でも保護が必要な希少種、日本のどこにいるの？　と三つのパートに分けてまとめた。「人気だからたくさんいると思っていたけれど、数が少ないことが分かった。大切に守っていきたい」と意見を書いた。母親の百亜奈（もあな）さんは「前に参加した時よりも記事を選ぶ力がついた」と娘の成長を感じていた。

試合成績 楽しく分析

佐々木心（しん）君(9)
神奈川県厚木市・小4

日頃応援するプロ野球・楽天の記事を集め、「前半失速、後半にっこり」の見出しでまとめた。「おばあちゃんが暮らす仙台」の楽天が好きで、勝ち負け両方の記事を左右に貼り分けた。家族で今年はすでに3試合を観戦。次は仙台で観戦後に、球場のゴミ分別を手伝うボランティアを体験する計画という。父親の雄三さんは「うまくまとめてくれた」と喜んだ。

温暖化対策 私の意見

大久保みそらさん(12)
東京都練馬区・小6

地球温暖化についてまとめた。選んだ記事は少なかったが、「レジ袋をもらわなかったり、節電したり、着ない服をリサイクルしたり、私にもできることに取り組みたい」とぎっしりと意見を書き込み、読み応えのある作品に仕上げた。母親の結子さんは「ここまで文字を書き込むとは思わなかった。温暖化に関心があることを初めて知りました」と驚いていた。

過渡期を迎えたNIE

全国大会の現場から

新聞を授業で活用する実践例が紹介される「第23回NIE全国大会盛岡大会」（日本新聞協会主催、盛岡市教委・岩手県大槌町教委共催、文科省など後援）が7月26、27日の2日間、盛岡市などで開かれ、先生や新聞関係者ら約1600人が参加した。大会は立ち見も出るなど大盛況となったが、中心となる新聞活用技術のある教諭らNIEアドバイザーの多くが50代以上となるなど、NIEを巡る状況は過渡期を迎えている。（教育ネットワーク事務局　住吉由佳）

教育界と新聞界が協力

新聞活用学習を意味するNIE（Newspaper In Education の略）は、社会性豊かな子供の育成などを目的にした、教育界と新聞界が協力して進める活動。米国で始まったのをきっかけに、日本では1985年の新聞大会で提唱され、年1回開かれる全国大会では、最新の新聞活用授業実践例が、NIEアドバイザーら多くの先生方によって報告されている。

今年の大会は、東日本大震災で甚大な被害を受けた被災地・岩手を会場に、「新聞と歩む　復興、未来へ」と題し、震災復興に新聞が役立つ授業実践例が20件近く報告された。例えば、大槌町の小中一貫校・町立大槌学園は被災経験を生かし、西日本豪雨の被災者の役に立つ支援方法を提案する公開授業を行った。「震災を知らない子どもたち」が増えつつある現状で、新聞を通して復興を肌で感じ、後世に伝えられる取り組みも多く報告されるなど、今大会が残したものは少なくない。

草創期世代が続々退職

しかし、NIE草創期から30年の時を経て、新聞活用実践を牽引してきた世代が続々と退職していく時期に入り、NIEの活動継続に黄信号が灯る地域も出始めた。

アドバイザー後継者難

日本新聞協会は、新聞活用技術のある小中高の先生方らを2004年から「NIEアドバイザー」に認定し、現在、約250人が、活用方法を助言したり、研究したりするなど、各地の教育現場で「新聞活用学習の核」として活躍している。

今大会でも、そうしたアドバイザーが集まった全国NIEアドバイザー会議が開かれ、教科単元に沿った新聞活用授業例を発表したり、週1回の朝学習の時間を新聞を読む時間にあてる学習実態を紹介したりなど、約40人がさまざまな取り組みや悩みを共有したが、ほぼ全員が50代以上。ある県のアドバイザーは「長年にわたって新聞活用授業に取り組んできた先生が退職したり、校長などの管理職になったりなどで舵取り役が減り、残った人員で運営していくのが難しくなっている」などと、新聞活用学習を広める活動継続に厳しさを訴える声も聞かれた。

悩みや取り組みを報告し合うNIEアドバイザー（盛岡市内で）

新聞を活用した学習を行うと、子供たちの読解力や表現力など学力がアップするというデータも各地で出ている。NIEアドバイザーは、そうした子供の姿を目の当たりにして新聞活用学習に魅力を感じ、広げたいと考える先生方ばかりだ。しかし、新聞を読まない大人が増えている昨今、同様の先生も増えるなど、後継アドバイザーを増やしていくのは、なかなか厳しい状況だ。

研修・講習のテーマに「新聞活用」も

2020年度から小中高で順次実施される次期学習指導要領の総則には、新聞活用が盛り込まれた。「写真比較」「記事比較」など、教科書に載った新聞活用に関する各単元をどう教えるか悩んでいる初心者の先生には、アドバイザーが新聞記事を授業に生かす方法を具体的に示せば、直接役立ち、新聞の魅力も伝わりやすいだろう。

社会に目を向ける子ども育てるために

初任者研修、3年目、10年目研修といった各教育委員会主導の教員研修や、大学で行われる教員免許更新講習などで新聞活用をテーマにするところも出てきている。今こそ鮮やかにニュースを切り取る経験を積んだNIEの先生方の出番とも言える。

ベテラン勢が大量にいなくなるまでに時間はさほど残されていない。

来年は栃木、2年後の東京は、大会開催から四半世紀を迎える記念すべき大会となる。読売教育ネットワーク事務局も、ニュースの見出しについて考えたり、情報の意味を考えたりする出前授業などを通し、先生たちと協力しながら、社会に目を向ける子どもたちを育てるための取り組みを進めていきたい。

会場では、小学生の公開授業を大勢の先生方が見守った（盛岡市内で）

取材から印刷まで

「新聞」をつぶさに体験

東京都立立川国際中等教育学校の4年生（高1）4人が夏休みに、読売中高生新聞編集室や読売教育ネットワーク事務局で、インターンシップを行った。同校からのインターンシップは、一昨年、昨年に続いて3回目。小此木咲希（おこのぎさき）さんら4人が、3日間のプログラムを体験した。

高校野球西東京大会を取材

初日は、中高生新聞の編集方針について石間俊充編集長の説明を受けた後、神宮球場に移動し、白石裕真記者の指導で高校野球西東京大会の準々決勝、東海大菅生と八王子の試合を取材した。記者室やカメラマン席を見学した後、猛暑をものともせずスタンドに出て、東海大菅生の応援団長へのインタビューにも挑戦。試合終了後には、両チームの監督や選手にインタビューする新聞やテレビの記者に交じり、メモを取った。それらをもとに、それぞれが見た「高校野球」を、400字詰め原稿用紙1枚の記事にまとめた。

編集会議で鋭い指摘

2日目は、中高生新聞の校了作業を見学。校閲部や編成部、さらに印刷工場にも出向いて、新聞が刷り上がるまでを目の当たりにした。「一つの新聞を作るのに、多くの人々が協力している」と驚いた様子だった。

さらに、石間編集長から高校野球記事の講評を受けた後、同紙の編集会議に出席。4人とも同紙の愛読者とあって、「紙面に登場するアイドルに偏りがある」など鋭い指摘を連発し、記者たちをたじたじとさせていた。

最終日は、中東やヨーロッパの特派員を歴任した教育ネットワーク事務局の佐藤伸企画委員から、「英字新聞の読み方」についてレクチャーを受けた後、会社見学コースに参加し、タブレット端末を使った模擬取材も体験した。3日間の体験を通して、生徒らは「記事の一つ一つに、いかに多くの情報を分かりやすく伝えるか、記者の思いが込められていることが分かった」「今後はさらに隅々まで読んでいきたい」と感想を話していた。

応援団のメンバーに取材する生徒たち

中高生新聞の編集会議で鋭い指摘を連発する生徒たち

「こども参観日」に記者の紙面解説

三菱UFJモルガン・スタンレー証券

三菱UFJモルガン・スタンレー証券は8月9日、東京・大手町の本社で「こども参観日」を開いた。講師に招かれた読売新聞東京本社社会部の石間亜希記者が、読売新聞や読売KODOMO新聞を使って子どもたちに新聞の読み方を説明した。

新聞の勉強からスタート

「こども参観日」は、同証券が社員の家族に職場への理解を深めてもらおうと、毎年夏に開いている。3年目となる今回は小学生53人が参加した。

冒頭の「こども入社式」では、藤原誠之人事部長が「きょう一日社員として楽しく学び、帰ってからお母さん・お父さんに、仕事のことをいろいろ質問してほしい」と歓迎のあいさつをした。参加者同士の自己紹介に続き、進行役の濵畑めぐ美部長代理が「証券会社の社員は朝、一番最初に新聞を読むので、新聞の勉強から始めます」と話し、石間記者を紹介した。

石間記者は、「見出しは、書いた記者とは別の専門記者が考えている。見出しを読むと、その記事で一番言いたいことがだいたい分かる」と明かした。例として6月25日付スポーツ面の記事「サッカーW杯 H組 乾 右で射抜いた」「本田3大会連続弾」「2度の劣勢はね返す」を挙げ、「三つの見出しだけで、試合の流れが何となく分かる」と話した。

見出しクイズに挑戦

最後に、8月1日付夕刊第2社会面の記事「味はいいけど、経営が…『まずい棒』銚子電鉄 発売へ」の見出しを伏せた紙面を配り、見出しをクイズにした。参加者は、「経営まずい 『まずい』で解決」などと傑作を披露した。石間記者は「時間がない時は、見出しだけでも読むとよい」と勧めた。

参加した小学生はその後、ディーリングルームの見学や荒木三郎・同証券社長との名刺交換などを行って社員の仕事を学んだ。

石間記者（奥）の説明を聞きながら読売KODOMO新聞を手に取る小学生ら

情報インフラを大研究！

NRIと読売新聞が中高生向け体験イベント

野村総合研究所（NRI）と読売新聞東京本社が協力して8月10と22日、東京・大手町で中・高校生向けの夏休みイベント「情報インフラを大研究！」を実施した。NRIが得意とする情報システムの構築と新聞社による報道を、社会を支える基盤（インフラストラクチャー）として同時に学んでもらおうと企画した。

記者体験やITプログラムに挑戦

中学生向けの10日には、中学2、3年生10人が参加。午前中にまず「新聞教室」を受講し、新聞社のしくみや新聞ができるまでの説明を受け、編集局を見学したほか、架空の町を取材して紙面を作る記者体験をした。

午後にはすぐ近くの「大手町フィナンシャルシティグランキューブ」にあるNRI本社へ。ガラス張りのオープンな会議室や、イベントやパソコンを持ち込んで仕事もできるカフェテリアを見て回った。「どちらもきれいで、働いている人が楽しそう」、参加者から声が上がる。

その後は3、4人のチームに分かれてNRIの「IT戦略プログラム」に挑戦した。カードを使ったゲーム形式でシステム・エンジニアの仕事を模擬体験する。顧客の要望に沿って効果的なシステムを提案するコンサルティングだ。

業界7位のコンビニエンスストアチェーンから8億円でシステム作りを発注されたという設定。コーポレートコミュニケーション部サステナビリティ推進室の都甲晋平さんの指導で、店舗の条件やシステムの内容が書かれたカードを順番に開けて、グループで話し合いながらシステムを構成して行く。

最終的に得点を集計し、どれだけ業績が上がったかチームごとに評価される。高校生や大学生でも得点がとれないこともあるゲームだが、この日の中学生たちはいずれも高得点で、中には業界2位までチェーンを押し上げたチームも。

「食品ロス」にアイデア

ここまでの学びを踏まえて最後は「食品ロス」をテーマに、情報システムや報道がどう関われるか、自由に話し合った。「商品の消費期限が近づくに連れて刻々と値段が下がる表示はできないか」など、ユニークなアイデアが飛び出した。

東京学芸大附属世田谷中学3年の坂入光太郎君は、「社会の問題を皆で考えるのは面白かった」と満足そうだった。

カードを前にシステムを考える参加者たち（右はNRIの都甲さん）

News

「月刊ワークシート」差し上げます

「新聞＠スクール 月刊ワークシート」は、その時々のニュースをイラストと記事で解説し設問に答えてもらう特集ページで、毎月初旬の読売新聞朝刊に掲載されています。

この特集を別刷り新聞として定期的にまとめ、希望する学校に無料でお送りしています。「東京2020 ここが新しい!」（2018年4月）、「女性が働きやすい社会へ」（同5月）、「宇宙の謎 迫る探査機」（同6月）、「SNS便利だけど危ない!」（同7月）をそれぞれテーマに取り上げた4か月分が再録されています。

希望する学校は、必要部数と送り先・連絡先・担当者名を明記しお申し込みください。

【送信先】ednet@yomiuri.com

海外で学ぶ・リレーエッセー㊹

独ヤーコプス大学ブレーメン「自然環境への変化」

立命館宇治高（京都府）卒、ヤーコプス大学ブレーメン（ドイツ）2年（執筆時）
堀雄斗（ほりゆうと）さん

「なぜドイツの大学を選んだのか」と繰り返し自問してきた。しかし、答えは未だにはっきりしたものではない。なぜなら様々な理由が絡み合っているからだ。

私は大学で環境学を専攻し、天然資源について学びたいと考えていた。しかし、高校は文系選択だったので、日本の大学の自然科学系学科へは志願することさえできなかった。

さらに、高校時代1年間カナダに留学する機会があったので、海外の大学への進学にためらいはなく、再度留学しようと決めた。

ヤーコプス大学ブレーメン（JUB）が見つかったのは幸運だったと思っている。そこでは、高校での修了科目に関係なく自然科学系の学科を専攻できるからだ。それに私は、ドイツの環境問題に関する政策決定や、ドイツにおける移民、難民問題に関する議論にも関心があった。学問的・社会的分野における興味と志望をかなえようと、この大学への進学を決めた。

進学当初の大学生活は楽しみに満ちていた。JUBの持つ国際的な雰囲気とドイツでの生活開始という新しい経験に興奮したものだ。しかし、大学に在籍することは楽しみばかりではない。勉強しなければならないことがたくさんあったからだ。

自然科学や数学を高校時代にほとんど勉強していなかったので、物理、化学、数学といった科目には苦戦した。地学の授業にも悩まされた。というのも多くの専門用語を暗記しなければいけなかったからだ。これらの難問を克服するのは容易ではなかったし、学習意欲も落ち込んだ。

1年次の終わり、ドイツ中部のハルツ山地への研修旅行に参加した。そこでの地質学的な特徴や、環境問題を調査するためだった。この旅行はとても実用的で、独自の考え方が求められた。自分の学んだ知識を総動員して関連付けて考えなければならなかった。教授たちはいつも「どうしてそれがこの環境にとって重要なのか？」「これが教室で学んだこととどのように関係しているのだ？」「どうしてそう考えるんだ？」と聞いてきた。これらの問いかけから、教室での講義は試験のためではなく、実社会に結びついているものなのだ、ということを思い出した。思い出すことで学習意欲が呼び起こされ、学習への情熱がわいた。

これらの経験から私は、実際の世界に飛び込むことの重要性を学んだ。教室の経験は必須だが、フィールドでの学びは学習をより実際的で面白いものにしてくれると信じている。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2018年4月19日）

ヤーコプス大学ブレーメン

ブレーメン国際大学として2001年に創立、2007年に現大学名となった私立大学。講義は英語で行われ、110か国の約1400人の学生が在籍するドイツ国内でも国際的な大学の一つ。

ヤーコプス大学ブレーメンのキャンパスの堀さん＝本人提供

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイトへ。 http://ryu-fellow.org

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0004294167でお読みいただけます。